



e-La Voz

「エー・ラ・ボス」と読みます

HCJB『アンデスの声』
日本語放送
メールマガジン
(第26号)

2005年1月8日発行

26日間 里帰りレポート

—エクアドルは青かった—

空港にて: 「まもなくキト空港に着陸…」 待っていた機内アナウンスがきこえたので窓の外に目をやる。機首を上げたコンチネンタル航空の旅客機は、暗闇の雲海を突き抜け右に大きく旋回した。夜霧のペールをくぐりぬけながら、眼下になつかしいキトの町並みの灯りがつづく。アンデスの宝石の輝きだ。赤道直下にあるキト空港は高度三千米近い。昼間あたためられた空気が夜間の急激な冷えこみで霧に変身して、山あいには帯状にひろがる街を包んでしまう。テキサス州ヒューストンを飛びたって5時間。真夜中近い空港は、その日、その時だけ、ぽっかりと穴があいたように霧が晴れたので無事着陸できた。ところが、出国の時はそうまっかにはいかなかった。深い霧のため着陸を断念した予定の飛行機が太平洋岸のグアヤキル空港まで飛んでいってしまったのだ。折り返し便なので、翌日に飛行機が太平洋岸からUターンしてくるのを半日待ってキトを飛び立つことになり、あとはドミノ倒し現象でヒューストン乗換えが遅れ、シカゴではターミナル待ちで遅れ、深夜に帰宅という、帰りは長い一日となってしまった。

HCJBにて: HCJB放送局の入口では、商売熱心なオタパロ族が民芸品を並べていた。いつものようにミサンガ(手編みの腕輪)を編んでいるパプロもいた。門衛も顔みしりなのでふたりとも近づいてきて肩をだいて挨拶をかわす。局内に足をふみいれてまず日本語部へ行ってみた。サインはまだそのままだったが、オフィスは右隣のケチュア語部が使用するようになったので入口がふさがれていた。左隣のドイツ語部に顔をだすと、アパートに隣同士で住んでいたエステルがびっくり。録音中のほかのスタッフと共にスタジオに入りこんでひさしぶりの再会。短波放送では意気のあった仲間だった。コール国際放送部長と面会するために局内を横切って3階建てのテレビ・センターに向かう。1階の自動番組送出室をのぞくと、昔のテープ・デッキに代わってコンピューター・パネルがずらりと並び小さな色ランプをちらつかせていた。2階はテレビ部、3階が英語部でその一室でコールさんが待っていた。いつもの笑顔で迎えてくれ、日本語番組の特別放送の件を切り出すと二つ返事で許可してくれた。オーストラリアからの送信まで提案してくれ、そのときぱきとした仕事ぶりと思いやりある対応はさすがと感心する。外に出ると、これまた運良く周波数アドバイザーのウエーバーさんとばったり。特別放送の送信時間と周波数について話し合うことができた。その足で印刷部へ。特別ベリカードの打ち合わせ中にカメラマンのバーキーさんもデザイン担当のジャイルさんも現れて特別ベリの話はどんどんすすんだ。番組構成のシナリオにしたがってマイクを手に「エクアドル音楽をどうぞ」のホルヘさん、「DXパーティーライン」のグラハムさんなどに突撃インタビュー。グラハムさんには、待ってましたとばかり逆に英語番組に出演させられてしまった。そのほか、観光にきていたオランダからの女性二人には「ブルー・クリスマス」の印象を。内田ファミリーには「エクアドルの今」を語ってもらうなど、機会をみて取材した番組がコンピューター上で再生・編集されてつぎつぎと番組ファイルになって画面に並んでいた。

里帰りクリスマス・スペシャル(1時間)は、12月25日にエクアドルとオーストラリア両送信所から放送。

HCJBコンサート2004: カナダからのゲスト、ポップ・バイオリニストのトレバー・ディクさんは、コンサートでは人気者だった。フットボール選手なみの体格なので楽器が小さくみえる。しかし、いったん弓をとりあげてバイオリンにあてて弾きはじめると、体中からエレキがほとぼり出るほどの音量になる。ゆさぶられるようなリズムと響きが波のように伝わると、ダイナミックな体の動きがそれを倍加し、曲が盛り上がったところで楽器とともに高く飛び上がって演奏が終わる。なるほどポップとはこのことだったのか。愛用のエレキ・バイオリンは通常の4弦にビオラの低弦を1本加えた5弦バイオリン。色はハンガリーでエレキ・バイオリンを発案した人にあやかって青色。伴奏の4人とのコンビもぴったりで、どの曲もすばらしかった。演奏の合間にトレバーさんは自分のことをこう語った。

キトの青空市場でアフリカの果物を見つけてなつかしかった。私はナイジェリア中央部の熱帯雨林の村イヤラで生まれた。父は医療宣教師として奉仕していたが、交通事故で亡くなり、残された7人の子供たちは母の手だけで育てられることになった。苦しい生活の中で母は、「地上の父親はいなくなったが、お前たちには天上の父親がついている」といって子供たちを励ました。私も人並みに悩み、恐れ、不安にゆれ動いたが、そのようなとき、いつも慰めとなり支えとなったのが、母のこのことばだった。ある日教会で『こころに来たりませわが主』という賛美歌をみんなで歌っていたところ、なんともない気持ちになり、「主よ、こころに受け入れませ。」と祈った。それ以来私は天の父がさらに身近に感じられるようになり、いまもその愛を感じながら生きています。



この証しは聴衆に深い感銘を与えた。キト市の創立記念日とクリスマスを祝うHCJBコンサートは今回はじめてキト市のジュニア・オーケストラと共演したが、HCJBクワイヤーがヘンデルの『ハレルヤ・コーラス』を演奏したのもはじめてだった。会場の文化会館(2, 200席)は4回のコンサートとも満席で、とくに最終コンサートでは1, 000人近くが入場できないという事態がおこるほどの盛況ぶりだった。

真っ青な空の下で: コンサートが終わって一息つくため、アンデスを下って日本人農業移住地サントドミンゴをたずねた。40年前に移住された田辺家族はアバカ(マニラ麻)栽培のほかに長男正裕さんが自然循環型農法によるバナナ園を経営している。いつものように農園を案内してもらったあと取材させてもらった。明治生まれの父正明さんにはビルマ戦線の生き残り兵士としての貴重な戦争体験を語ってもらいテープに収めた。終戦記念日にあわせて8月ごろ紹介したいと思っている。キトにもどって日本人学校のクリスマスに招かれた。わが家の日曜学校で学んだ生徒たちが今は教師となって次の世代を育てている。アンデスから羽ばたいていった子供たちは、今ではみんな大きく成長した。その晩、日本人会忘年会がひらかれ平松大使夫妻と同席したので、「アンデスの声」39周年記念コンサートでいただいた挨拶のお礼を述べることができた。星降る夜、ピアノ・リサイタルがあり、孫のリンダ・ジョイが『きよしこの夜』を弾いたが、そばで伴奏する父親の姿に、ひと昔前のリサイタルの面影が重なり、さすがに時の移り変わりを感じさせられた。青空の下での26日間は、目覚めるといつの間にか雪降るシカゴにもどっていた、という夢のような思い出となっている。私たちの人生日記2004年の最終ページは、このように楽しく、有意義だった里帰りを象徴する青色のページで鮮やかにしめくられたのである。

HCJB日本語放送担当

在 主 尾 崎 一 夫 久 子

【ホームページのご案内】

HCJB日本語放送のホームページ(<http://www.hcjb.org/japanese/>)には、リスナー・コミュニケーションのためのふれあいコーナー「[フォーラム](http://www.hcjb.org/japanese/forums/)」(<http://www.hcjb.org/japanese/forums/>)と、メールマガジンのバックナンバーを揃えた「[メールマガジン e-La Voz らいぶらり](http://www.hcjb.org/japanese/mnz/)」(<http://www.hcjb.org/japanese/mnz/>)のページがあります。どうぞご利用ください。

このメールマガジンは、HCJB日本語放送の管理するメール・リストに登録されている方に無料でお送りしています。このメールマガジンをご覧になってのご感想やご意見、ご要望などは、[HCJB日本語放送](#)までお送りください。

また、このメールマガジンの配信停止、配信先変更、あるいは新規ご登録も[HCJB日本語放送](#)までメールにてお知らせください。なお、メール・リストは配信先メール・アドレスのみで管理されていますので、配信先変更をご希望の場合には、現在登録されている配信先も併せてお知らせください。



Copyright © 2005 by HCJB. All rights reserved.

日本語ホームページ: <http://www.hcjb.org/japanese/>

Eメール: kozaki@hcjb.org

郵便の宛先:

Mr. & Mrs. Kazuo Ozaki

1920 Berkshire Pl., Wheaton, IL 60187-8050, U. S. A.
